

岩橋武夫とキリスト教

—クエーカー派との関係を中心にした覚書—

室 田 保 夫

はじめに

岩橋武夫の全体像についての研究はまだ緒についたばかりであると言っていい。岩橋が日本の代表的なキリスト教社会事業家として、石井十次や留岡幸助、山室軍平らと比較しても遜色のない重要な人物である点から考えても、研究の立ち後れは明らかである。社会福祉の歴史や概論等においても、彼についてはほとんど触れられない状況である。しかし、岩橋の生涯を辿っていく作業は、社会福祉史のみならず、キリスト教史などからも重要であり、彼は決して脇役におかれることのない人物である。この小論はそうした状況を踏まえ、とりわけ岩橋の思想の根幹となっているキリスト教、とりわけクエーカー派（フレンド派、友会）との関係に焦点をあてて論じていくものである（以下、本文では原則として「クエーカー」という用語を使用する）。

周知のようにクエーカーは17世紀中葉、英国においてジョージ・フォックス（George Fox 1624-1691）によって始められたプロテスタントの一派である。フォックスの活動は初期には英国国教会等から迫害を受けたが、次第に教勢を広めていき、米国では殖民地時代にウィリアム・ペン（1644-1718）によってペンシルベニアを中心に広まった。日本では1885（明治18）年末にキリスト友会の宣教師としてジョセフ・コサンドが派遣され、翌年より伝道が行われた。「内なる光」「内なる良心」「キリストの聖霊」を重視し、平和主義を主張する。静かな祈りの集会の場を重視し、基本的には他のキリスト教派のように教会を持たない独特の様式を持つ教団である。日本のクエーカーの人物としては新渡戸稲造がよく知られており、社会事業家としては川田貞治郎（藤倉学園）がいる。他の教派に比し日本でも小規模な団体である。

岩橋は大正末期から英国エジンバラ大学に留学し、そこでクエーカーの大きな影響を受けて帰国し、日本のクエーカー（日本友会）に入会し関係を密にしていき、その機関誌『友』にも多くの論文を発表した。岩橋の生涯、あるいは全体像を考究するにおいて、我々は思想的な根幹を占めるキリスト教、とりわけクエーカーの影響を決して看過できない。換言すれば岩橋とクエーカーとの関係は岩橋研究にとってきわめて重要な課題なのである。ただ資料の渉猟が十分でなく、この小論は研究ノートであることを断っておく。

1. キリスト教との出会い

岩橋とクエーカーとの関係を論じるに当たって、さしあたり岩橋がいかなる経緯でもってキリスト教との出会いがあったかを彼の自伝『光は闇より』（日曜世界社、1930）等を参考にしながら、瞥見しておくことにしよう。というのは岩橋のキリスト教への回心に至る経緯は彼自身の心の推移やそのモチベーションにおいて、きわめて重要な要因が指摘されるからである。それには多感な青春時代における失明という辛い経験に触れておかなければならない。そうした彼の人生に於ける苦悩の体験があればこそ、キリスト教との出会いにつながり、ひいてはクエーカーへの信仰もこれを基点にして始まるからである。

岩橋武夫は1898（明治31）年3月16日、大阪市東区南大江にて生まれた。クリスチャンホームで育ったわけではないが、少年時代に日曜学校に通っていたという思い出もあり、キリスト教への素養もなかったとは言えない。1916（大正5）年4月、早稲田大学に入学するが、翌年春、網膜剥離と診断され程なく失明の宣告を受け、失意のどん底の中で帰阪する。失明という人生の苦難を味わった岩橋は1917年の大

晦日に自殺を決行するが、母の「何でもよいから生きておくれ。お前に死なれては何処に生甲斐があるものか」(岩橋『光は闇より』26頁)という言葉で覚醒し、生きていくことを決意する。失意の中の「自死願望」から「生きる覚悟」という大転換がなされたが、この体験がキリスト教信仰の伏線となっている。

岩橋は、1918(大正7)年春、「障害」を受け容れ、生業としての「按摩」になることを志し大阪市立盲啞学校に入学する。ここで岩橋は点字を習得し生まれ変わっていく。元来、頭脳明晰な彼は指から読むことが可能となり、多くの書物に接していくこととなった。彼は聖書にも関心を抱くようになり、そして「ヨハネ伝」9章に出会ったのである。その章に曰く、「ラビこの人の盲目にて生まれしは誰の罪によるか、己のか親のか」という問いに対し、イエスは「この人の罪にも親の罪にもあらず、ただ彼の上に神の業の顕れんためなり」云々(3節)と応えた。このイエスの言葉が彼の心の琴線に触れ、かくて岩橋はこの聖句でもって「闇の問題が一切解決された」(『光は闇より』44頁)と述懐している。この学校で、彼のキリスト教への導きをした人物の一人が熊谷鉄太郎であり、彼の勧めもあり関西学院へ入学することになる。そして1919(大正8)年1月、母と共に大阪の教会にて赤沢元造牧師より洗礼を受けたのである。ちなみに学生時代から岩橋はエスペラントに興味を示し、「盲目の詩人」ワシリー・エロシェンコ(1890~1952)とも知己となった。

岩橋は関西学院では英文科に入学するが、同級生は寿岳文章だけであった。学校で寿岳はウィリアム・ブレイクを岩橋はジョン・ミルトンを研究した。彼がミルトンを選んだ理由の一つにミルトン自身も44歳の時、失明したという境遇への共感があったのだろう。もちろん彼の代表作 *Paradise Lost* (失樂園) はダンテの「神曲」と共に、キリスト教文学の傑作であるが、17世紀の文学であり難解であることを百も承知の上での選択であったと推察される。それだけ彼の英語の実力も優秀であったという証左でもある。卒業論文も「ミルトンのソネット研究」であり、その作者や作品に凝縮された哲学や思想に共鳴しての研究であったことは想像するに難くない。

また、キリスト教主義を標榜する関西学院での生活では、キリスト教の影響がきわめて大きかったと思われ、ベーツ学長も岩橋のよき理解者であった。ちなみに関学での勉学には妹静子のサポートがあった。しかし後に妹は級友寿岳と結婚することとなり、代わりに矢野きをが一灯園から派遣されてくる。そして岩橋は後に彼女と結婚する。当然、岩橋もここで一灯園の創始者たる西田天香とも繋がっていく。西田は1921年に『懺悔の生活』を上梓し、彼の考え方は文学者の倉田百三ら当時の多くの人に影響を及ぼし、岩橋も西田と親しい関係になり、彼からも多くの影響も受けることになる。また、西田は岩橋の留学や福祉活動、教育事業に対しての支援を行っていった。そして西田の思想の体得はクエーカー入信の一助となっているように思われる。そして関西学院卒業後は母校の大阪市立盲学校の教師となった。

2. クエーカーとの出会いーエジンバラ大学留学

(1) エジンバラ大学留学

関西学院を卒業し、母校である大阪市立盲学校で教鞭を執っていた頃、留学の件が持ち上がる。こうした経緯は岩橋きを『菊と薊と灯台』(日本ライトハウス、1969)や『光は闇より』等によって披見することが出来る。当初、学生時代からの友人でクエーカー教徒であった神戸のジャパン・クロニクルの記者J・A・ブレイルスフォード(J. A. Brailsford)という人物から留学の話が持ち上がった。ブレイルスフォードは岩橋の家を訪問し岩橋の外国留学の件を推奨し、「盲人の社会事業をやって見ようとするなら、関西学院の卒業だけでは足りない。ぜひ英国に渡り、かの地の大学を卒業してのち、さらにその方面のことを視察研究しなければならない」と、そして「実は自分に少々計画するところがあるので、君に行く気があるなら、できるだけ方法を講ずるから」(『菊と薊と灯台』8頁)と提言した。彼からすでにエジンバラ大学のチズム教授に、岩橋のことは伝えており、正式の学生として受け容れてくれる手はずも整ってい

ることも伝えられた。また金策においても岩橋を安心させ具体的に英国への留学へと進んでいった。ちなみにブレイルスフォードは第一次世界大戦の時は、兵役を拒否し服役した経験をもつクエーカー信者であった。岩橋とその後交友を続け、世界情勢が厳しくなった時でも書簡を通して議論し、岩橋自身もクエーカーの根底的な課題と向き合うことになった。

かくして岩橋は1925（大正14）年8月6日、妻と共に神戸港を英国に向けて解纜した。船中では偶然だが米窪満亮（小説家、政治家）の世話にもなっている。10月1日、エジンバラに着している。エジンバラの生活、とりわけ大学生活や多くの人々との交友等々は、きを夫人の書いた前掲書『菊と薊と灯台』に詳しい。それに依拠しつつ岩橋のエジンバラでの生活を垣間見ておきたい。

10月9日から授業が始まる。岩橋の回顧から窺うと初年は英文学史－グリヤソン博士、一般哲学－ケンプ・スミス博士、宗教哲学－バターソン博士の講義を受けている。翌年6月には授業が終了し、哲学、宗教学を修了した。特筆すべきは大学での学びにおいて、教授をはじめ多くの支援があったことである。たとえば資料の読み聞かせ、ラッドラム博士による住居の提供、また神戸のブレイルスフォードは米国歌エーカーの週間雑誌ユニティーに岩橋の伝記等を掲載した。それがエジンバラに廻ってきて、クエーカー教徒のラッドラムの眼に触れ、ますます彼に対する人々の同情と支援が高まっていった。宗教哲学の権威バターソン博士は岩橋のレポート「人格神論としての神の証明」を優秀論文に推薦し、奨学金の支給を実現させるといった応援もした。

留学二年目の夏、すなわち1926年の夏、偶然にもエスペラントの世界大会がエジンバラで開催されることになった。岩橋はエスペラントについては関西学院時代から興味を持っており、絶好の機会ともなった。会はコンノート殿下を総裁に36ヶ国、1000名の参加があり、会場はセントジャイル教会で開かれた。岩橋は大会で分科会の副議長となり、積極的にこの機会を利用したが、それは彼の實力も認められた結果であったと思われる。

さて岩橋がこの地でクエーカーに興味を抱く切っ掛けになったのも先述のラッドラムから当地のクエーカーの集会を誘われたことが契機になっている。1926年6月の書簡の文頭には「今日は日曜日で、朝クエーカーの集まりにまいり、さきほど帰り昼食を済ませてから、これを書き始めました」（岩橋きを、前掲書、31頁）云々とあり、あるいは岩橋がクエーカーの集会で一灯園のことを話したことの報告もあり、常にクエーカーと密接な関係を持つようになっていく。もちろんその考え方や信条に納得してのことであったろう。

そして1927年5月に岩橋は学位取得のためのコースが終了し、その試験を受けることになる。それに合格し「M・A」の学位を授与された。多くの人々に支えられながら、もちろん岩橋はそれだけ努力をし、夫人も異国の地で彼の勉学や生活を支えたことはいままでもない。かくして2年間の意義ある留学生活を修了し、7月25日に想い出多いエジンバラを後にしてロンドンに着する。

岩橋のロンドン滞留の宿からはクエーカーの本部に近く、「毎日クエーカーの本部に行って読書をしております」（岩橋きを、前掲書、73頁）と認めている。ロンドン滞在は当初2ヶ月の予定であったが、盲人福祉関係の資料調査と蒐集が予定通り進捗せず、オックスフォード行きを断念しロンドンでその仕事を継続していった。ロンドンでは好本督やクエーカー派の支援もあり、岩橋は英国の盲人福祉の実態や点字図書館の視察、文献の調査、蒐集等に力を費やした。この調査が帰国後、『社会事業研究』誌に発表され、後に『愛盲－盲人福祉ABC』（日曜世界社、1932）という著作にも生かされ、視覚障害者の福祉運動への弾みをつけていくことになる。ちなみに当地の新聞『マンチェスターガーディアン』（8月30日付）に「日本人学生の成功－盲人の為に働く」が掲載され、岩橋の奮闘ぶりが紹介された。

3. 帰国後の岩橋－「神の国運動」と米国講演旅行

帰国し岩橋は母校の関西学院の教員となり、学生への教育はもちろん、当然研究に勤しむ生活を送る。

そしてエジンバラで入信したクエーカー教徒としての活動は帰国後も継続されていくことになる。その間の事情を夫人は「昭和三年ころより良人が各方面へ講演行脚にでて、その時、良人の話を聴かれた近畿各地の方々から良人を中心とした祈りの集会をもつようと依頼されたので、私共、英国滞在中属していたキリスト教の新教の一派たる、フレンド派（クエーカー）の集りをつくり、その名を『霊交会』と名づけて発足しました」（岩橋きを、前掲書、84頁）と回顧している。その集まりは自宅やYMCAでの祈りの会にて行われた。日本のクエーカーは東京や茨城県といった関東が中心であったが、岩橋を中心とした大阪においても拠点をもつに至ったのである。そして昭和初期の「神の国運動」において積極的に参加していった。

1930（昭和5）年より、キリスト教が超教派的に展開した運動に「神の国運動」がある。その前年4月に国際基督教連盟会長モット博士の来日を機に全国伝道運動が企画され、秋には創立総会が持たれ翌年から賀川豊彦を中心に本格的に展開されていくことになった。この運動に岩橋もクエーカーの立場から参加していった。そして各地において講演活動を行っている。『基督友会七十年史』（基督友会日本年会、1957）には「友会もこれに参加すると同時に、各伝道者相互に講壇を交換し、伝道応援を協議し、活発な伝道が行われた。五年十月には会員岩橋武夫が大阪から出向いて、東京はじめ各地の月会において、特別伝道会を開いたのもその一つ」（39頁）と記されている。そして「エジンバラ大学に留学中友会の信仰をえた同氏が、神の国運動のために東奔西走して、証しをしたことが、この運動への大きな貢献になったことは、付言を要しない」（同頁）と、岩橋のこの運動への貢献を評価し年史にも記録されている。

こうした教育や福祉活動、そして神の国運動の講演と多忙の中で、『光は闇より』（1930）を刊行し、それがベストセラーともなり、続けて、講演集『私の指は何を見たか』（1931）『暗室の王者』（1932）『星とパン』（1932）等の刊行、そしてこれまでのミルトン研究を集大成した『失楽園の詩的形而上学』（1933）も上梓するにいたる。岩橋には一つの可能性として、級友の寿岳もこの著作を高く評価しているように、研究者としての道もあったが岩橋はその道には進まなかった。そこには彼がクエーカー信徒としての信念、もしくは覚悟があったのかもしれない。

ところで岩橋の母校関西学院は1929年4月から創立時の神戸原田の森から、上ヶ原に移転し32年、念願の大学に昇格する。戦前、関西学院は視覚に障害のある学生を受け入れてきた学校である。その29年4月に入学してきた学生に大村善永がいた。英文科の彼は当然、岩橋の訾咳に接し、またベーツ学長からも影響を受け、信頼される学生となった。関学卒業後は横浜薫盲院で教鞭をとっていたが、日中戦争時、彼は日本の方策に疑義をもった。そして後に満州に渡り、当地の盲人福祉の事業に携わっていく。この満州行きにおいて、日本のクエーカーの指導者たるギルバート・ボールズに相談し、「満州盲人保護並びに教育に関する建白書」（拙稿「大村善永研究ノート」『関西学院史研究』19、参照）を提出する。大村もボールズと関係もち、しばらくクエーカー本部に起居していたことを考えると岩橋と大村、ボールズと不思議な関係を思わざるを得ない。

さらに岩橋は1932年6月にブリントン（H・H・Brinton）の*The Creative Worship*の訳著『創造的礼拝』を警醒社から出版する。岩橋は「序」で、現代のキリスト教の危機的な状況の中で、ブリントンの思想はクエーカーの礼拝の本質的な課題に肉薄していると刊行の意義を指摘している。そして巻末に「クエーカーへの葉」という解説文を付している。そこには宗教は「信仰と社会」の課題に応じて行く必要がある。したがって「宗教的信念に於て得たものを実現せざれば、宗教は単なるユートピアに過ぎず、またこの宗教意識を以て社会に発現せんとするところにこそ、我らの立場がある。この宗教信念、宗教意識が社会化すればする程、それは神の国実現となるのである。神の国はこの世を離れてあの世に建つべきものでなく、自然の中に超自然の姿として実現せんとするところに宗教の本質があり、そこに社会問題に対する我ら人間の出発点を置くべきだと思ふ」（152-153頁）と。かくして宗教というものは、「一方に於て神秘的であると共に、他方に於いては社会的である」（154頁）ということが可能であると、彼のクエーカー観を開陳している。

こうした中で彼は1934年に至り、米国の団体から招かれ講演を依頼されることになる。その一つは日系人が多く住む太平洋沿岸地域での講演であり、二つ目がクエーカーの中心地フィラデルフィアを拠点にしての講演活動である。中でもフィラデルフィアのクエーカー本部からの招きの意味は大きい。当然この時代になれば岩橋のクエーカーとしての立場も明確となっている。

こうした岩橋の歩みを念頭において、次章からクエーカー（日本友会）の機関誌『友』に掲載された岩橋の主な論文を取り上げ、彼が如何なる考え方を抱懐していたのか、また変容があったかを『友』にみる岩橋の論説と主張」として3つの章に分けて、時代的なエポックとなった代表的な論文を紹介していくことにしよう。

4. 『友』にみる岩橋の論説と主張（1）－昭和初期の論文から

岩橋がクエーカー（日本友会）の機関誌『友』に論説を掲載し始めたのは、英国留学帰国後からである。彼がエジンバラ大学留学中にチズム教授やラッドラム博士らのクエーカー派の教授から影響を受け、集会にも参加し、クエーカー教徒になっていたことを考えれば当然のことである。筆者の調査した限り、彼は『友』に30個に及ぶ論文や報告を掲載している。彼が一般的なキリスト教系紙誌では『神の国新聞』に、神の国運動の一環である講演記録等が掲載されているが、その点からみればやはり『友』の存在は大きい。ちなみに西田天香の一灯園機関誌『光』にも10個の論文を掲載している。このことから、如何に岩橋とこの教派との関係が密であったことが理解出来る。

ところでフレンド派の機関誌『友』は、従来の『愛の友』（1906年刊行）を改題して、1921（大正10）年5月に刊行された月刊雑誌である。岩橋のこの雑誌に披見される最初の論文は、英国からの帰国後、1929（昭和4）年12月刊行（第39号）の「闇に輝く日－世界ライトハウス運動と日本盲界」である。まずこの小論を見ておこう。内容は帰国後のライトハウス運動に言及したものである。その文頭には「闇に光の輝く日が来た。あらゆる人間の文化的努力の中で、最後まで看過せられてゐた盲目の人々に対する暖い涙に満ちた救の手が下される日が来た。それは弱き者、虐げられた者に対する社会正義および人間愛の新しい自覚である。人間が人間を見る眼人間が人間を考ふる心に大きな変動が来たのである」と記している。ちょうど米国からライトハウスの創設者マザー夫人の来日を契機にして、新たな視覚障害者福祉の運動が立ち上がった時であった。日本友会（クエーカー）の指導者ギルバート・ポールズも、岩橋を中心に据え、日本においても「日本盲人福祉協会」（1928年創設）を拠点に、確固たる活動、「日本盲人文化運動」を展開していこうという方針を企図した。そしてこの会にはクエーカーの新渡戸稲造が副会長として名を連ねているのも注目される。また、同号において「エジンバラで勉学中、友会々員となられ、今回聖坂に転会せられた」と岩橋夫妻のことが報じられている。岩橋は友会の正式の会員となり、クエーカーのこの運動への期待があったものと思われる。

『友』41号（1930、2、5）から45号（1930、6、5）まで5回にわたって連載した「社会問題と宗教」という長い論文は岩橋がクエーカーの一員として、当時、農村や都市において深刻な状況を呈していた社会問題に如何に対処していくかを論じたもので興味深い。主な論点は現実の社会に対してキリスト教、とりわけクエーカーが如何に関わっていくかである。そしてマルクス主義、西洋哲学、キリスト教との関係が問われている。そういう問題意識から導かれるものが多い時勢を背景に、この論文も社会問題という課題に対するクエーカーの態度が表明されている。

ここで岩橋は「宗教的信念に於て得たところのものを我々が実現しなかつたならば宗教は単なるユートピアであり、マルクスの言つた如く阿片になり終るであらうと考えられる」、「この宗教意識、この宗教信念が社会に合理化されて行くときに、それは神の国運動となり、社会的キリスト教の存在を確立するものとなります」と主張する。そして「宗教はただ讚美歌を歌つたり、机上の抽象論を戦はずやうな有閑階級の仕事ではなくして、あの血に滲んだ十字架を目指して精進すべき生命の問題であります」、社会問題と

宗教とは「全く不可離の関係」であると指摘し、かつこの時代こそその答えが求められている時であると主張するのである。昭和初期はキリスト教界においても、中島重や竹中勝男ら社会科学への関心が強い風潮であったし、社会問題への言及も盛んであった。そういう時代背景の中で、日本のクエーカー派も如何なる「社会」との関係を構築し、生起する実際の社会問題に対応していくかが問われたのである。

5. 『友』にみる岩橋の論説と主張 (2) —クエーカーへの期待

1933（昭和8）年10月15日、日本クエーカー派の重要人物たる新渡戸稲造が死去する。日本は第一次大戦後、国際連盟において常任理事国の地位にあり、以前、新渡戸稲造は国連の事務局次長というポストに就き、重要な役職を担っていた。その前年、周知のように日本は満州をめぐる問題でリットン調査団の報告を受け、世界各国と対峙し国連脱退という道を余儀なく選択した。「太平洋の橋」として日米の関係修復に努力した新渡戸も、こうした状況によって苦悩の日々を送るが、彼の死は「平和主義」を柱とする日本のクエーカーにとっても大きな損失であった。翌34年4月行われた友会の年会において、岩橋は一日目に「友会の現代世界に対する使命」を、二日目には「友会の日本基督教界に対する任務」（91号）という題で講演している。前者においてはバルト神学とオックスフォードグループの運動にふれ、どちらも友会のお株を奪うような重要な思想、運動であると評価する。後者においては「平和問題、東洋の平和なくして、世界平和はない。感傷的な平和愛者・ピースラバーでなく平和行者・ピースメーカとして国産平和運動を起したい」と述べ、また「聾啞者盲人は棄てられて居る。も少し理解の眼の開かれ、最熱意ある御奉仕が望ましい」と訴えている。このように岩橋は日本友会においても理論的な中心人物であった。

また岩橋のクエーカーの活動としては地元大阪の「霊友会」が日々の拠点であったが、それについては「大阪霊友会はフレンドとして信仰が生きて居るために若干はたらいて居る。私は慈善事業的にはやつて居らぬ。私はクリスチャンとして殊にフレンドとしての御恩返しを広く日本の基督教、狭くは友会に尽したいと思ふ」（92号）と同派への覚悟を開陳している。

次に岩橋が『友』100号（1935年2月）に掲載した「米国より帰りて」という論文を見ていこう。岩橋の米国への講演旅行については上述したが、1934年8月15日に神戸を解纜し、米国へ講演旅行をした報告が、きを夫人の「米国行脚」（同号）と共に詳細に報じられている。最初は太平洋沿岸においてカナダからメキシコに至る200数回の講演、11月中旬から12月末まではセントルイス、インディアナ、ワシントン、フィラデルフィア、ニューヨーク、シカゴ等において100回の英語講演を終えたこと、聴衆者の延人数は6万近くの多数に上ったと報じている。

米国での講演や人々との接触において岩橋は平和やその他もろもろの課題について議論していき、多くのことを考えた模様である。その中で「愛国」という概念について彼が如何なる認識であったかを見ておきたい。岩橋は「日本を狭義な排他的国家主義の鉄壁に閉じ込めるか、乃至はこれを広義の交友的大日本主義たらしむるかは、懸つて今日の日本人の双肩にある大きな課題である」と狭義の排他的な愛国を退ける。「私は真の愛国とは日本を世界の日本として、向ふ両隣と和平の中に正々堂々国運の隆盛を図るべきである」こと、国家百年の大計のためには「排他」でなく「愛他」で為されるべきであり、「今少し今日の日本に大国民的度量と忍耐が必要であることを思ふ。真の愛国はこの度量と忍耐からのみ生れ来るであらう」と述べている。排他的国家主義を否定し、愛他的な健全なナショナリズムとしての「愛国」を評価する。

講演の中心地は当然、フィラデルフィアが拠点であったが、数十回の講演をし、その内容については三分の二は日米平和工作に費やされ、三分の一は日本に於ける基督友会の過去及び将来に関する一般問題、神の国運動、日本のキリスト教青年学徒等を扱ったと報じている。特に時代的にも平和問題、とりわけ日米の平和の課題であり、それについて岩橋の考えが縷々述べられている。「平和を愛することは、割合に容易である。が、平和を造り出すことは仲々に至難である。いひかへれば、愛と正義とが成立しない限

り、真の平和は来ないといふことである」と、そしていざ平和の実現となると国家間の諸事情もあり一筋縄でいかない問題でもある。したがって「もし我々が日米間に具体的な平和を真に翹望するならば、相互間により良き諒解を造るため、出来るだけ悪材料を撤回して好材料の発見に努力しなければならぬこと。否、もつと積極的にいへば好材料を造り出さねばならぬことである。このためにこそ国民外交が必要であり、文化的平和工作がなされねばならぬのである」と述べる。したがってこれを媒介できるのがキリスト教であり、世界的キリスト教としての使命を全うすることになる。「この信仰を以て出来得る限り歪められない材料を基調に、日米の平和工作を待望して、私は明日の日の日本を世界に奉仕する大日本たらしめたいと祈つて止まない」と結んでいる。岩橋の米国訪問のミッションはこうした時局に於ける日米の平和工作の一環もあったことが窺える。1937年4月のヘレン・ケラーの来日もかかる一面を有していたと思われるのである。

ところで日本のクエーカーは1936（昭和11）年に布教以来50年を迎えることとなる。50年の記念式典は36年10月16日から18日まで、聖坂基督友会の会堂で挙行された。それに関する岩橋の論文は127号（37年5月）掲載の「来るべき五十年の為に」という論文である。これは前年の9月、フィラデルフィアのフレンド日本号のために寄稿したものである。50年を迎えるに当たって「超非常的我国の現状」を鑑み、他教派と違う独自性を主張し、行動が求められる。すわわちクエーカー（友会）のアイデンティティーとミッションの確認である。

その為には先ず第一に「友会は内なる光」に帰ることが重要である。「友会の友会たる根本的宗教体験は神に対する垂直的方向と、人と社会に対する水平的方向との結合点に於ける此の光の自覚であり、指導であり励ましであり、体験であつた事を忘れてはならない」、そして「光を愛とし真理とする処に、個人と集団とを通しての実践的神秘主義が成立つ事を私は改めて力説したい」と述べている。2番目が「礼拝は静聴と無プログラム」が基本的にあるとし、他の教派と相違したクエーカー主義の特徴を評価している。3番目が「愛の実践としての平和運動」にあるとする。「三百年に渡る友会の歴史から平和運動を除いたら、その生命の半ばは消失すると云つて過言ではない。その友会の日本に於ける平和運動は如何、余りに遅々として振はざる事甚しいではないか」と慨嘆する。そして岩橋は平和運動を「単に戦争を対象としての運動より更に一步を深め」ていくことにあるとし、「我らの日々の生活を戦争の原因としない事からのみ正しい平和の世界を実現しやうとするのである。故に宜く友会は此の立場に立つて徒らに諸外国の動向をのみ懸念せず自ら独自の平和即生活を、いと小さき事の一つより実行すべきである」と主張している。この時の彼の平和への視点は戦争中における彼の態度の基本的な姿勢の共通性が窺える。

岩橋は続けて「友会が内なる世界と外なる世界へ実現し行く燃ゆるが如き召命を感じるならば、之を説教ならぬ生ける福音伝道によつて表示すべきだと思ふ。言い換へれば独自の社会事業が悩みと苦しみの渦中にある隣人に対して偽らぬ『神の種子』の実践行動としてなさるべきである」と説く。それは事業も他宗派と違うクエーカー独自のものでなければならぬ。その例として「現代都市生活の感覺的魅惑に駆られた華々しい社会事業の片隅に、盲人に対する重大な仕事が残されてゐるのではないか」と誰も振り向かない視覚障害者に対する事業を挙げる。あるいは「疲弊し行く農村に生ひ立つ農村男女の教化」も重要である、すなわち「前者は暗黒に住む人々を光に帰へす事業であり、後者は現代化せんとする青年男女を土に還へす仕事である」と。岩橋のライトハウス運動や茨城県の農村運動もクエーカーの独自の事業として位置づけられる。最後に「『友』の意義」として、お互いが精神的な絆で結びつく友会の存在意義を高く評価している。

6. 『友』にみる岩橋の論説と主張（3）—日中戦争中の論文から

岩橋の『友』への論文掲載は、1937年頃から少なくなっていく。それは丁度、日中戦争の勃発と岩橋が国家政策を首肯していく時期と軌を一にしている。一方、岩橋はライトハウスの機関誌『黎明』（点字

雑誌)を発売し、毎号その号の巻頭論文を執筆していくが、総合雑誌を目指した『黎明』に執筆のエネルギーが集中していくことも考えられる。岩橋は日中戦争が勃発した数ヶ月後、『社会事業研究』(25巻11号)に「非常時常時の信行」という論文を掲載する。この中で「戦争は悲劇の父であると共に又革新の母である」という有名なフレーズでもって彼自身の立場を表明した。この言葉を理解していくことが総力戦体制下の岩橋を理解していくことにつながる。

この時代、確かにフレンド派の理想、理念とは少し違った、岩橋独自のキリスト教観(クエーカー観)となっている。この時期の岩橋の思想を知る象徴的な論文として1939年5月に発表された「理想の山より下りて」という論文(4月16日の聖坂日曜礼拝での講演)があり、これを見ておく必要がある。ここには泥沼化した日中戦争という状況、そして日本政治の動向が背景としてあることは明白である。

岩橋はこの論文の冒頭に長谷川如是閑の言葉を引用しながら、キリスト教立場に二つあると説く。それは「概念的、理想主義的方法」と「総て物より離れず、その処理法を考えていく」という「現実的な方法」である。そして「基督教の理想主義が、その看板、形をはづし去つて、その精神を活かす方法を探る時にのみ、新鮮な力強い基督教が出現するのだ」と解釈する。「私たちは単なる平和愛好者であつてはならぬ。艱難を喜んで忍ぶ勇敢な平和建設者たるべし」と、したがって「基督教は西洋流のイデオロギーが多い故に、建前だけははつきりして来たのであつた。世界の燃ゆる思想、主義の中に於て、基督教のこの理路は確かに大きいものである。然し余りに理想大にして、日暮れて道遠しの感が無きにしも非ず。いくら遠く迄行つても、吾人の足が其処に届かなければ達しえないではないか」と言う。

岩橋はこのように理想主義を捨て、「己が足」「健全な足」を考えてみなければならない、と主張する。「今日は理想主義がどうしても山を降らねばならぬ秋である。洋の東西を越えて、平和を希求するものは、単に口を以て説くに非ず、平和を来らせんと地につける努力を為さねばならない」と説く。こうして、クエーカーの理想とする平和への戦いは岩橋において現実的な課題へと矮小化されていった。したがって「ジヨージ・フォクス以来燃え伝はつた信念の強き実践てふ建前極めて現実的な立場」とであると解釈されていく。そして「さうならう、山を降りて。新しき出口を東亞の天地に創設せんがために」と言うように、非戦や反戦運動を展開するのではなく、国家政策を受け容れながら社会事業等による現実的な矛盾解決という中に、クエーカーの「平和」を見ていくことになる。

もちろんここには国家に抗していくことは、当時の日本の状況からしてきわめて困難なことであった。そして、こうした傾向はキリスト教界の国家への対応でも見られる。礼拝が行われた1939年4月16日という時期を、『基督友会七十年史』を紐解いてみると、その年4月1日と2日に年会が行われ、その標語は「一致奉公」であった。その前年の年会でも日本基督教連盟の方針と友会との関係が問われてくる状況であった。そして39年の年会も如何に対処していくかの会員間の一致した結論は出ていない。そして5月には宗教団体法が、その翌年の皇紀二千六百年記念事業が、さらに41年にはキリスト教会合同の成立へと進んでいく。そうした流れの中の岩橋の発言であった。岩橋はこのように現実路線という思想でもって戦時を送ることになるが、岩橋の戦争に対する平和への想いは彼の精神奥深く沈潜され、視覚障害者への福祉活動、社会事業への専心が「平和」への道として展開されていくことになる。「戦争は悲劇の父であると共に又革新の母である」という言葉がそれを象徴している。そこに我々は困難な時代における岩橋の時代への処し方を把握していかざるを得ない。それにはアジア太平洋戦争時中の岩橋の言動や思想の究明、たとえば彼の『海なき灯台』(1943)や機関誌『黎明』に表明されたものから考察していく作業が残されている。そうした資料の更なる渉獵と共に彼の内奥の真実は如何にあったのか、それを問うていくことが必要であろう。これについては後稿に譲りたい。

7. 戦後の岩橋とクエーカー

(1) 『創造的平和』をめぐって

アジア太平洋戦争は1945年8月15日をもって、日本の無条件降伏という形で終焉を迎えたが、戦争の悲惨な爪痕は計り知れないものとなっていた。日本のクエーカー（友会）は如何なる戦後を迎えたのであろうか。戦前にクエーカーは日本基督教団の組織の中に入っていたから、戦後は新しく組織のアイデンティティを確立する所から出発しなければならなかった。『基督友会七十年史』によれば、1947（昭和22）年7月22日に20人の出席者を得て年会結成の準備会が開催された。その中にギルバート・ボールズと共に岩橋武夫夫妻の名前がある。そして年会の結成準備委員として鮎沢巖、上田辰之助、山野隆明、宇梶洋司、鞍馬菊枝、小泉一郎、猪野保らと共に選ばれている。かくして同年11月に東京三田台町のフレンズ・センターで戦後第1回の日本年会が開催された。日本の月会の中心は東京、茨城、大阪であったが、岩橋夫妻は大阪の代表者となっている。そしてこの会の議長は鮎沢とともに岩橋が務めた。2日目の午前に岩橋が「指導講演」をしている。このようにクエーカーの再建においても岩橋は中心的に動いている。そして戦後の再建と共に、49年5月に『友』の復刊第一号が刊行された。

平和主義を重要な目的としているクエーカー派にとって、岩橋もその信仰から、精神的にも敗戦時のショックは計り知れない。ましてや本土空襲、広島、長崎の原爆を目の当たりにして、如何に戦後を生きていくかが問われたことであろう。戦後、イギリスのフレンズ協議会とアメリカのフレンズ奉仕団はノーベル平和章を受賞する。非戦・反戦運動が「理想主義」であると批判し、「現実主義」を唱導した岩橋にとって、このことは複雑な思いであったと推察される。

そうした中で岩橋は1949年9月に『創造的平和』という著作を上梓することになる。ここではその著作について見ておきたい。この著の副題は「クエーカーの思想とその実践」となっている。「序にかえて『戦争と平和』」の中で、この著作刊行の計画は一昨々年のことであると回顧している。つまりこれを信じれば、岩橋は1946（昭和21）年、つまり終戦の翌年に上梓する意図があった。おそらく岩橋の戦前における決着を早くつけておく必要に駆られてのことであつたらう。戦前彼はクエーカー派の一信者として生きたこと、その信仰において彼は何等かの反省と共に、罪の意識があつたということであろうか。

この著作の出版時、すなわち1949年9月、岩橋はヘレン・ケラーの招聘に応じて2度目の渡米をすることになるが、序で「日本を鹿島立つ近き日」と署名しているように、渡米前にこれを上梓したのである。そこには「世界を鉄のカーテンで真二つに分けて、今や雨を呼ぶか嵐を呼ぶかの危機を思わせる今日平和国家としての日本の存立を神かけて祈る私は、祖国が狭い誤つた日本世界観を十字架にかけて、世界の日本、神の日本へ育ちゆくように待望すること切なるものがある、この意味で私は心ある人々の秋の窓辺に本書を捧げ、幸に平和創造への使命を果すことが出来得るならば望外の喜びである」（「序にかえて」6-7頁）と記している。そしてクエーカーが「永遠のエルサレム」に向かって、新しく「平和憲法」を掲げている日本に於いて、「平和の殉教者」として進んで行くことは当然のことであると述べている。

したがって「わが国のクエーカーたる者、ここにきびしい反省がなくてはならない」（同上、4頁）と。「きびしい反省」を口にする背景には、反戦活動が出来なかった以上に、国策批判さえも出来なかった悔悟、反省が存したのだらうか。岩橋にとって平和とは一体何なのか。岩橋は「数と物質に対する近代人の迷盲から覚めて、質と精神の実験的生命に生きよう」（同上、4頁）と素直に信仰に生きる大切さを披瀝する。

さて、この本の構成は1「緒論」、2「文化の危機と新しき人間性への解放」、3「新世界創造と平和問題」、4「クエーカーの平和運動の歴史的展望」、5「礼拝の創造性と信仰生活の在り方」、6「結論」となっている。クエーカー派の誕生とその歴史を触れながら、常に原点に帰り、20世紀の後半を如何にクエーカーとして真実に生きていかねばならないか、と記している。彼はこの著で「クエーカー的立場」という用語をしばしば使用する。この「立場」は常にクエーカー教徒として己の依つてたつ「内なる光、内なる

良心」であったろうか。そしてこの著の性格が「倫理的社会的神秘主義」にあることを表明する。

「結論」の中で岩橋はキリスト教は「神の国」実現へ動いてきたと把握している。「神の国」とは「此の世に於ける戦争否定と真に自由平等なる民主主義社会の樹立を意味し、最後には無階級、無国境的な単一世界樹立にまで発展して行く」（139頁）と解し、「絶対平和と自由な社会」を神の国と考えるなら「その国は、イエスの教えに従いこれをわれらの内とわれらの外に考えねばならなくなってくる。換言すれば『見ゆる教会』と『見えざる教会』との概念における関係」であり、それは人間の内にあるものと人間を超越していくものとしてある。「かかる『内なる光の場』に於いて、垂直的に『見えざる教会』と『見ゆる教会』を貫き、水平的には『内なる神の国』と『外なる神の国』とを貫きあうところにクエーカーの世界観が成立し、その実践が成就するのである」（148頁）と述べている。

「クエーカーは沈黙に聴いて行動に雄弁であった。平和と愛と正義の使徒、二十世紀的平信徒運動家としてのクエーカー——私はその信仰とその実践をかく論究し来たつて、遂にそれは彼らのそれでなくして私自らのそれであることを自覚せざるを得なくされる……略……失明ここに三十年、その闇とその苦しき運命の杯は、却て私に尊き客人を約束する祝儀の機縁となってくれたことは、実に感謝である」（152頁）と己が心情を吐露している。このように岩橋には第二次大戦への反省と今後のクエーカーのあるべき姿、そして己がクエーカー教徒としての信仰への覚悟を表明したのである。著の最後のフレーズは「永遠の故郷エルサレムへの道を、汗に染み泥に塗れて開拓に献身しつつある者の上に、無限の想いをはせ敬愛の誠を献げて、世々、限りなき平安と祝福を祈るものである」（153頁）となっている。

(2) 『友』の復刊と岩橋の死

1953年11月の年会において「日本友会の回顧と展望」の発題者に名を連ねているのはハワード・ブリントン、宇梶洋司、岩橋武夫の3人であった。しかし翌54（昭和29）年10月末、岩橋は天に召される。それについては『基督友会七十年史』において年会から亀山仙次郎、ブルース・ピアソンが趨いて告別式に参加したことが記され、「故人は、その失明のドン底から光を見出した入信の手記『光は闇より』で多くの人々に福音を証した。わが国盲人福祉運動の先駆者でもあった。そして、戦後は率先して、大阪における友会の育成と、年会の再組織に努力を重ねてきた」（84頁）と記している。このように岩橋は日本友会の年史記録をみても、戦後積極的に友会の再出発に貢献していることが窺える。

既述したように大正時代に刊行された『友』は戦後、友会の再出発に鑑み復刊されることとなる。その21号（1955、2、10）は岩橋の召天を悼み追悼号の様相となった。平川正寿「岩橋武夫君をしのぶ」、加藤利夫（大阪月会）「岩橋先生を偲ぶ」、大饗茂「岩橋先生とロンズデール先生」の3個の追悼文が掲載されている。これをみても岩橋のクエーカー派での貢献が大きかったと推察されよう。

追悼文の一人、平川正寿は「基督道は死にて活くる道である。社会は連帯である。社会悪、人の罪は凡ての者が之を負わねばならぬ。これを浄め、これを払い去ることも連帯責任である。他人の罪、社会悪のため、義人は苦しむ。犠牲になる。犠牲愛のみが、人を動かす、人を化する。社会を浄むる動力である」と表現して岩橋を偲んでいる。また加藤利夫は岩橋が「人格者」であったと悼んでいる。さらに大饗は湯川秀樹とのエピソードを紹介している。つまり岩橋がニューヨークで湯川と会ったとき、湯川が明確に平和主義者の立場が窺えないような印象であったことを残念がったが、「その後、湯川博士もはっきりした態度を表明され、科学者の団体であるSSRSに入会された。岩橋先生の念願も叶えられたわけである」と想い出を披露している。ちなみに、岩橋がなくなった1954年の11月13、14日にもたれた基督友会日本年会の総会記録には「岩橋武夫氏死去に対し一同哀悼を捧げて議事に移る」（『友』21号）とあることから、彼のこの友会での存在の大きさを物語っている証左であろう。このように岩橋は戦前、戦後、クエーカー教徒しても生きたのである。

おわりに

以上、岩橋武夫のキリスト教、とりわけ大きな影響を受け、そして彼の行動の源泉ともなったクエーカー（フレンド）派との関係についてその概略を論じた。彼の生涯を概観しても、人生に於ける偶然性、キリスト教からみればそれが必然なのかもしれないが、神の摂理を感じる。青春の真っ只中で予想だにできなかった失明という絶望や辛酸を嘗めたが故に、それによってキリスト教に目覚め、西田天香の一灯園とも交わり、そして偶然にも英国留学においてクエーカー派と関係を持つようになった。一灯園の機関誌が『光』であり、クエーカーの「内なる光」、そして岩橋の主著『光は闇より』や聖書にしばしば登場する「光」という概念に魂の繋がりがあったのだろうか。また賀川や中島重の「神の国運動」「社会的基督教」「贖罪愛」との接点があったことも重要である。岩橋はクエーカーの教義の説明の中で「神の国」という言葉をよく使用する。また米国フィラデルフィアにあるクエーカー本部からの招聘に応え、渡米し講演活動を展開し、その時以来、生涯の友人ヘレン・ケラーとの出会いもあったが、彼女はスウェーデンボルグの「神秘的な基督教」に傾倒していた。この小論ではヘレン・ケラーとの関係については論じなかったが、ケラーと信仰面においても響き合う何かがあったのだろうか。また岩橋が唱導した「平和の思想」は、時代状況と如何なる関係を問えばいいのか、今後の課題としたい。ともあれこの小論はクエーカー機関誌『友』を中心にして岩橋とクエーカーとの関係を素描したに過ぎない。彼の生涯を辿るにつけても、信仰の偶然性と共に、かかる神との必然性、そして総力戦体制下において現実に戦争という課題に如何に対処していくか、組織と政治、良心と政治、信仰と国家といった課題の重要性を再度意識せざるを得ないものとなった。こうした課題は今後の宿題としてひとまず擱筆することにする。

*文中で引用した岩橋武夫の著『菊と薊と灯台』（日本ライトハウス、1969）は、『盲人たちの自叙伝』21（大空社、1998）に記載されているものを利用した。また日本友会の機関誌『友』の閲覧については、キリスト友会日本年会に御世話になりました。記して深謝申し上げます。

